

ケーニヒスベルクにおけるカントの眼差し —— カントの地理学再考 ——

北 條 慈 応

要 旨

本論はイマヌエル・カントの地理学の価値を再考する試みである。具体的には、カントにおける「世界（全体）」という概念を軸に、カントの空間論とカントの地理学思想との間にゆるやかな連関を見出し、これまであまり重要視されなかったカントの地理学をカントの思想体系の中に位置づけることで、ケーニヒスベルクという辺境の啓蒙都市においてカントの目指した、「啓蒙」する「世界市民」の眼差しを浮かび上がらせ、その現代的意義を問うことを目的としている。まず第1節においてカントの生涯過ごしたケーニヒスベルクという都市が当時置かれた状況を考察し、彼の思想の醸成に大きく作用したであろう背景を再現する。続く第2節では「啓蒙」という言葉をキータームとしてカントの『自然地理学』を分析する。そこにおいてカントの地理学を目指したものが「経験の舞台」としての「世界」を「全体」として捉え、体系的知識を建築術的に構築すること、すなわち、経験科学における啓蒙の運動であったことが明らかとなるであろう。第3・4節ではそもそもそうした経験を可能にするカントの空間論について考察される。それによって経験の無限の領野としての空間を可能にするカントの空間論の無限性と（超越論的な意味での）主観性が明らかとなり、第5節では2節での建築術的「全体」概念と3・4節での空間概念との関わりが論じられ、カントの空間論とカントの地理学との有機的繋がりが明らかとなるであろう。最後の6節ではそれまでの考察から結論としてカントの眼差しが再現され、それがヨーロッパの辺境において醸成されたにもかかわらず高度な普遍性をもつものであること、そしてさらに現代社会における諸問題にそれがいかなる有効性を持つか、が考察される。

キーワード：イマヌエル・カント、ケーニヒスベルク、地理学、啓蒙、世界

(2004年10月6日論文受理, 2004年12月3日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

はじめに

既に述べたように本論はカントの『自然地理学』を、その他の著作との有機的連関のなかで再解釈することを目的としている。しかしそもそも現代において、イマヌエル・カントの地理学などという古臭いものを引っ張り出すことに

いかほどの価値があるというのであろうか。哲学においてカントの『自然地理学』を重要視する動きはほとんどないし、逆に地理学においてもどれほど好意的な解釈者であっても彼と現代地理学との間に地続きな影響関係の地平を見出す者はいない、といってよいであろう。また私にもそうした評価がいわれのないものとも思われない。単なる博物学的、骨董的興味とイマヌ

エル・カント個人に対する興味以上のものが彼の地理学そのものにどれほどあるというのであろうか。

キーワードは（少なくとも私にとってのそれは）「啓蒙」、とりわけドイツにおける啓蒙主義と「世界」である。まず「啓蒙」とは日本語の語義に従えば「蒙昧なる状態を啓く」ことであり、概して理性への絶対的な信仰がその根底を貫いている。人間ならば誰でもアクセス可能な、「自然の光（*lumen naturale*）」が蒙昧なる状態を遍く照らし、光を当て、明らかにすること（*enlightenment: Aufklärung*）、このような理性の光への絶対的な信仰こそが近代を開始し、近代を規定し続けたのである。さらにドイツにおいてはその動きは非常に多彩な側面をもっていた。三十年戦争、神聖ローマ帝国領の分裂などの理由により、近代的統一的国家としてのスタートを明らかに切り損ねた後進の地域において、都市の発展と啓蒙の促進は同じ事態を意味していたのである。ある都市の発展はそのままその都市における人間の啓蒙を、近代化を意味していたといつてよい¹⁾。これはイギリスやフランスの啓蒙思想の展開と比較してみれば明らかである。宗教的、政治的に統一され、パリやロンドンのようなそれぞれの国の文化を象徴するような巨大都市がある国家に比べ、ドイツにはそのような巨大な中心地はついで存在せず、そのかわりに各都市においてその啓蒙運動の内容は非常に多彩な面を持っていたのである。

二つ目の「世界」という概念は、カントにおいて単なる物的認識にかかわる三次元空間という意味に限定されず、倫理的、美学的、政治的、法的な含意をも含んだ多重的な概念である。カントの認識論や自然科学、倫理・美学思想や政治思想などにおける様々な試みはこの「世界」概念において交差していると言える。カントのこうした「世界」についての様々なアプローチは「全体」の統一性を求める、という点で共通しているのである。そしてこのような全体的体系性の追求という態度が非常に鮮明に打ち出されているのが『自然地理学』であると私は考える。

イマヌエル・カントは、ケーニヒスベルクと

いう後進国ドイツのなかでも、間違いなく辺境と呼ばれる辺鄙な辺鄙な（「学問の舞台をつとめるよりも、熊を育てるのに適した」²⁾！）町で、「啓蒙とは何か」を自ら体現し続けた人物である。もちろんそこにドイツにおける経済や政治の変化の時期が重なったことは疑いないが、結果としてケーニヒスベルクの啓蒙はカントとともに始まり、カントの死とともに終わったと言っても過言ではない。

本論ではカントの「啓蒙」を、住む場所も文化も違う他者とのかかわりのなかで、他者と自分を、そして「世界」を「全体」として統一し、自らをその「全体」（世界市民）の中の一人として位置づけ、そして主体的に、能動的にその「全体」へとかかわっていく理性の働きであり、それを推進する運動であるととらえる。現代において地理的な距離はそのまま「近さ・遠さ」を意味しない。家から一歩も出ることなく、我々は世界の様々な地域の情報にアクセス可能である。そのような現代においてケーニヒスベルクから生涯一歩も出ることなく、あらゆる地域の情報に貪欲にアクセスし、高度に普遍性を持った思想を実現したイマヌエル・カントという男の「啓蒙」を見つめなおすことは、非常に有意義であると考えられる。それはインターネットで接続されたばらばらの個人である我々日本人の叫ぶ「国際化」というものを再考することにも繋がるのではないだろうか。このように本論は「辺境」において「世界」全体をとらえ、「啓蒙」を推進し続けるイマヌエル・カントの眼差しを再現することを目的とするものである。

1. カントとケーニヒスベルク

「大都会で、帝国の中心であり、帝国による州段階の様々な組織があり、大学（学問を育てるための）がひとつあり、またさらに海外貿易の条件も備えている。河川によって内陸部とも、またさまざまな言語や風習を持つ隣接する辺鄙な国々とも行き来の便のある都市—そのような例えばプレーゲル河畔のケーニヒスベルクのような都市は、人間についてであれ、世界についてであれ、知識を広めるの

にふさわしい場所だと思われる。そこでは旅行などしなくても、そうした知識を獲得できるのである。」³⁾

ここで簡単に18世紀のケーニヒスベルクという都市が置かれていた状況を取り上げておこう。ケーニヒスベルクは東ドイツの文化的中心地ライプツィヒからも遠く離れ、しかも1772年のポーランド分割までは周囲をポーランドに囲まれた「飛び地」であり、地理的にも文化的にもヨーロッパの限界と言ってよい場所であった。1787年に至ってさえフォン・パチコはこの地を「学問上のシベリア」⁴⁾と評しているほどである。これが1730年代まで遡れば、その辺境ぶりたるや相当なもので、ヴォルテールはこの地を「文明化した世界の最果て」⁵⁾と呼び、のちのフリードリヒ大王、プロイセン皇太子フリードリヒに至っては、前述の熊を育てる云々以外にも、この町の「田舎ぶり」を表現するのにこれ以上ないほどの言葉を惜しみなく贈っている。曰く、「私が間違っていないければ、無為と退屈がケーニヒスベルクの守護神です。と言いますのも、ここで会う人々、ここで吸い込む空気はそれ以外の何者も心に思い起こさせないのですから」「馬の数が非常に多く、しかもよく耕され、植民されたこの国は、ただの一人も思索する人間を生み出していません。私は断言します。ここに長くとどまっていれば、私は、自分がひょっとして持っているかもしれないわずかな健康な理性も失ってしまうでしょう。同じく、ここにとどまっているくらいなら、死んだ方がましでしょう。」⁶⁾

とはいえケーニヒスベルクの絶望的な状況も18世紀なかばに入り、フリードリヒ大王の戴冠の頃から大きく改善されていく。もともとケーニヒスベルクの背後にはポーランドとロシアというヨーロッパ化を強く希求する新興国家が隣接しており、ヨーロッパの東西を繋ぐ中継地としての役割を担い得るポジションにあった。また、ロシアは1758年から1763年までの間、東プロイセンを占領するが、この間の占領はこの町の発展にむしろ恩恵をもたらしたと言える。ロシアのヨーロッパ文化吸収への憧れは、この町の大学のアカデミズムの地位を引き上げるという事態を引き起こした。また、占領によって既

存の身分・階級が意味を成さなくなり、小さな町で様々な身分と様々な人種の人間の間で濃密で自由な社交が実現した。そうした土壤のもと、18世紀中ごろにはこの町は多くの企業が集まり、フランス人、イギリス人、オランダ人、ロシア人、ポーランド人、ユダヤ人などのさまざまな国と民族の人間が行き来するコスモポリタンの性格を持つに至っていた。同時に文化的水準も徐々に上昇し、1750年代に新しい印刷屋と本屋ができていく。

当時の書籍の交換貿易という要素は重要である。書籍の内容にかかわらず、分量や紙数によって書籍を取引する当時の状況下において書籍商は「およそ書籍市で何らかの意味のあることをするためには、出版業と販売業を兼任し、生産と販売を直接に結びつけて」⁷⁾いる必要があった。こうして書籍市において各業者は自らの商品を並べ、販売したいものを互いに交換し持って行く。このような流通網があつてはじめてケーニヒスベルクのような辺鄙な地域にも各都市の雑誌や新聞が流通するようになる。業者は市場の需要を察知し業者間のネットワークを各都市と繋ぎ、また自前の作家を確保するために作家を援助した。まさしくカントも、そしてカントの論敵ハーマンもまた出版業者カントーの家の下宿している。さらにカントーは店の商品を学生に無料で閲覧することを許し、さながら「情報センター」としての役割を果たしたのである。こうしてカントー書店は「この町の知的世界の取引所」⁸⁾となった。しかもケーニヒスベルクを除けばダンツィヒとザンクトペテルスブルクの間には本屋が一軒もなかった時期」⁹⁾においてである。交換貿易の終わりとともにケーニヒスベルクの出版業者が困難に陥ったことを思えば、カントは「学問上のシベリア」にいつとき出現した幸運で特殊な状況下にあったことは間違いない。

当時(1762年)、ヘルダーがこの町にやってきたときの感想は前述のフリードリヒのそれと対照的である。

「貧しく豊かなモールンゲンからこの大きな、さまざまな職業のある、騒々しく商売にあふれた町に突然やってきたのだ！ありとあ

らゆるものに私はどんなに驚いたことか！すべてが私にはどんなに大きく思われたことか！」¹⁰⁾

ここまでのケーニヒスベルク評の差は、単に両者の身分や出身地の差だけに依存するとはいえないであろう。このようにカントの青年期には、海外資本の流入、ロシア軍の占領などがケーニヒスベルクのピエティズム的儉約を追い払い、贅沢な生活や男女の自由な交際が当たり前となっていた。

こうした町の変貌はカントの私生活に大きな変化を与える。もともとポーランドやロシア、バルト海沿岸諸国の外国人子弟も多く通うフリードリヒ学院に通ってはいたものの、「奴隷的少年時代」¹¹⁾と自ら語る暗い少年時代を過ごしたカントではあったが、この頃から講義が終わるとカフェでコーヒーを飲み、ビリヤードに興じたり、カルタなどを行うようになり、服装にも気を遣うようになった。交友関係にこうした変化は如実に現れ、彼はロシア軍将校や各国の商人たちと特に親しく社交するようになる。なかでもイギリス人商人のグリーンとはその死までの20年間変わらぬ友情をもった。（ヤッハマンの伝記においてカントが彼と知り合うきっかけがアメリカ独立戦争の是非についての論争だったとされている点は、伝記の真偽は別として非常に象徴的である。少なくともこのエピソードはケーニヒスベルクの国際性と自由な議論の社交を余すところなく表現していると言えるからである¹²⁾）。カントは『純粹理性批判』を書くにあたり、その中の全ての内容をあらかじめこの商人グリーンに意見を求めてから書いたと語ったと伝えられる¹³⁾。このことは批判前期の彼の哲学が単に哲学者たちだけでなく、海外の実業家たちとの交遊の中で編み上げられていったことを示す点で大いに注目すべきである。彼の批判哲学ははじめから社会のほうを向いていたのである。

また、論争空間の濃密性という点で、ケーニヒスベルクが理想的であったと評価する解釈も存在する。1784年のカントの『啓蒙とは何か』はベルリンにおいても発行されたにもかかわらず、この本への最も体系的なリアクションはケーニヒスベルクにおいて3ヶ月以内に既に論

敵ハーマンによって書かれていた。また、『純粹理性批判』が出版される前にヒッペルの長編小説の内部に既にカントの哲学における重大な転換が論じられており、ハーマンは『批判』を校正刷りの段階で読んで反論を書いていたのである。これはケーニヒスベルクが東西文化の中継地として様々な文化の交差する町でありながら適度に小さかったことが幸いした一つの結果であると言える。多様な人種的文化的背景を持つ人々が適度に限定された空間において議論することで濃密な論争空間が生じる。ヴァイゲルは「このように素早い、しかも厳密かつ密度の濃い返答は、距離的に近いことによってのみ可能であった。それはこのような形ではドイツ語圏で一回限りしか存在しなかったコミュニケーション共同体が生み出した成果である」と最大限に評価している¹⁴⁾。

また浜田義文の指摘するところであるが、このようなケーニヒスベルクでの国際的市民生活が、カントがイギリス、フランスの先進的近代思想を受容するにあたって、その受容性を高めたであろうことは疑い得ない。浜田はこうした60年代前半から半ばにかけてのケーニヒスベルクの変化が「学者カント」から「人間カント」への転回を促したと考える。彼によれば、そうした「転回」は決定的にはルソーによって促されたものであるが、それにはケーニヒスベルクにおいて勃興する近代市民層と社交するなかで、カント自身が市民的経験の地平に立ち、近代市民の一員として自己を自覚することが不可欠であった¹⁵⁾。このような自覚のもとにカントはドイツの後進性とその「啓蒙」を自らの課題として痛切に感じる事ができたのである¹⁶⁾。

このように「独断のまどろみを破」った¹⁷⁾ヒュームや、「誤りを正し」「人間を尊敬すること」¹⁸⁾を教えてくれたルソーの思想を理解する上で、単なる書物の上の理解に留まらない生きた近代市民主義の見本に直接触れる機会を彼はここ、辺境都市ケーニヒスベルクだからこそ得ていた、と言えるだろう。健康上の理由があったとはいえ、カントが他の都市の大学からの再三の招聘を断り続けたこととあわせて考えれば、冒頭に挙げたケーニヒスベルクについてのカント自身の評は決して単なる地元びいきと断

ずるべきではない。

2. 「啓蒙」としての自然地理学

カントの『自然地理学』の扱う領域は広く、陸上の地形から火山や地震、海流、風など通常の地理学の対象のみならず、様々な地域の植生やそこに住む民族の身体的特徴や文化までを含み、「博物学的知識の羅列」という批判もやむなし、といった体をなしている。「人類の住所としての地球表面を、その地域的差異という観点から研究する」¹⁹⁾ という地理学の定義には当てはまり、研究対象としては同じものを扱いつつながら、そこにカント独自の地理学的説明様式の提供はできていない、と言えるだろう。しかし彼の地理学を彼の思想体系全体のなかに当てはめるとき、そこに「博物学的知識の羅列」以上の意味を見出すことは可能である。

端的に言うならば、カントにとって地理学とは「世界」を「全体」として扱う経験的学問である。また、カントにおいて「世界」とは「我々が全ての経験を得ることになる舞台」²⁰⁾ である。さらに言えば「我々の熟練を示す芝居が演じられる基盤であり、舞台である。世界とは我々の認識が獲得され、応用される基盤である」²¹⁾。この「世界」はまた、内官の対象としては心、人間であって、これを人間学が担当し、外官の対象としては「自然」であって地理学が担当する。地理学は人間学と並んで実用的、経験的学問として「世界」「全体」を対象とする学問なのである。また、カントにおいては、地理学は「世界」の認識の為の予備学であって（実際カントの地理学は教養課程の学生の為に開かれた講義であった）、研究対象を個別的にそれ自身としてでなく、「全体」との連関において考察しなければならない。この「全体」がはじめにあることがカントにとっては非常に重要であって、彼は、単に無闇やたらと多様な知識を与えられても、それは体系的で確実な知識になることはない、つまり蓋然的な知識にとどまり、科学的な認識を得ることはできない、と考えていた。「全体」という理念が先行的に存在してはじめて、雑多な知識がそれぞれに固有な位置・意味をもって

いることが示され、「世界」についての確実で体系的な知識の拡張が可能になるのである。さらにこうして得た知識の分類の仕方は二つあり、そのうちの一方はカントが採用したものであり、もう一方はリンネのそれである、とカントは言う。彼によればリンネのそれは論理的な分類であり、カントのそれは自然的な分類である²²⁾。リンネのそれは例えばある花があればそれが地球上のどこにあっても同じ花として界・綱・目・属などの範疇に分類される。しかしそれは「頭の中で行った分類」²³⁾ であってそのままでは実際の世界との関連を持たない「自然の集合」でしかない²⁴⁾、とカントは考えた。これはカントにとってはごく自然なことであって、『純粹理性批判』において論理的で分析的な関係を担当する悟性は、直観的・総合的な時空関係を担当する感性と厳密に区別されねばならなかったのである。

このような「全体」という建築術的 (architektonisch) 理念をはじめに持つことによって、我々が世界という舞台で得るさまざまな経験が知識の全体の中で「いかなる種類に属し、いかなる場所を示すか」²⁵⁾ が示される。「建築術的」理念とは、理性がアプリアリに課した目的のことを言う。したがってそうした理念の要請する統一は単なる体系的統一ではなく、ある目的に適った全体との関連ではじめて各部分が意味を持つような、そのような体系的統一でなければならない。設計図なしに家を組み立ててもそこには木材の集合ができあがるのみで、すぐに瓦解してしまうであろう。このような建築術的な「全体」が必要だとされることの理由の一つに、とりわけ人間の認識が限定されているということがある。我々の認識は時間的・空間的制約を不可避に受ける。時間的には我々の一生は限られており、自分の生まれる以前と自分の死後の時間において起こる出来事については直接経験することはできない。空間的にも我々の移動範囲には限界があり、一生足を踏み入れることのない空間の可能性はどこまでも残るであろう。それゆえ我々は「必然的に他人の経験を利用」²⁶⁾ しなければならない、そのことによって認識を拡張する。その際、もし「世界」の「全体」の建築術的な見取り図がなければ、

我々はそれらの独立した知識をまとめあげて、体系的な知識、実用に足る知識を構築することなどできはしないのである。

このような性格はカントの体系において自然を扱う『自然地理学』と並行して、内官の対象たる心を扱う『人間学』においても見出される。

「人間学の対象領域を拡張する手段としては旅をするのが一番であるが、さもなければ旅行記の類を読むだけでもよい。とはいえいずれにせよ、人間学の対象領域をいっそう拡張するためによその土地に何を期待すべきかを知っておきたいのなら、町の仲間であれ田舎の仲間であれ仲間との交際を通して、事前に故郷で人間知をものにしておかねばならない。こうした旅の見取り図なしには（それは人間を前提とする）世界市民は人間学に関して、いつまでも狭い視野から抜け出せないままにとどまるであろう。ところで人間学はすべからず哲学によって秩序付けられ導かれるべきだとするなら、そうした事前準備においては常に大局的な知識が局地的な知識に先行するのであって、そうでないとせっかくものにした認識もすべて断片的なガラクタに墮してしまい、学問となることができないであろう。」²⁷⁾

カントはこのように世界についての経験的知識の獲得を頻繁に「旅」になぞらえる。彼の「旅」に対する二面的な態度は興味深い。ケーニヒスベルクから一步も出なかったにもかかわらず、彼は「旅」というものに非常に興味を持ち、同時に、旅行者の旅行記を「読むだけでもよい」²⁸⁾と考えた。実際に自らが旅行し体験することへの素朴な信頼性を彼が持っていた形跡はない。しかし実際に自分で旅をする場合であっても、やはり「常に大局的な知識が局地的な知識に先行する」ことが学問的知識獲得のためには不可欠である、というカントの考えは一貫していると言えよう。結局それがなければ、実際に旅行したとしてもその認識は「断片的なガラクタ」となる。実際に旅をしても、伝聞に頼っても、いずれの場合でもカントにとっては「大局的」な「全体」の先行的獲得が不可欠なのである。

このように『自然地理学』におけるカントの試みとは、「全体」を先行的に持ちつつ「世界」についての知識を獲得することであり、これはそのまま他の知識との比較・吟味を含意する。つまり地理学における建築術的方法とは、いわば情報への主体的、能動的なかわりであって、カント的啓蒙精神の実現を意味していた。

「我々の啓蒙された時代の健全な趣味は、今日では十分に広く行き渡っていると思われる。とすれば、自分の視野に入らない他の地域も含めて、地球上に見られるあらゆるさまざまな自然の驚異を知ること何の興味も示さないという人はまずいないと考えてよいであろう。そして次のこともまた、少なからぬ利点であるとみなしてよい。すなわち、人の言うことをすぐ信じて感嘆したり、はてしない妄想をはぐくんだりすることに代わって、今では慎重な吟味が重視されるようになり、それによって我々は信頼できる証拠に基づいていっそう確実な知識を手に入れることができる立場に置かれたのである。そしてこの立場に立てば、自然の驚異についての正しい学を得る代わりに作り話の世界に迷い込む危険はもはやない。」²⁹⁾

若き日のカントのこのような意気込みはそのまま『自然地理学』の建築術的方法論に合致する。確実なる方法論によって光の当たらぬ領域に光を当て、蒙きを啓く。先行する建築術的全体において理性が体系的に吟味することによって他者からの伝聞による情報が確実な知識となる。カントにとって地理学の研究は、「啓蒙」の精神を経験科学において実行することに他ならないのである。

3. カントの空間論 I —唯一の空間—

ここでいったん、カントの空間論をごく簡単に概観する。空間における経験的対象の認識を獲得することが地理学なら、そもそもそうした経験的対象の認識の根底に存し、それを可能にする空間そのものへの考察が不可欠であるから

である。

『純粋理性批判』において結実したカントの時空論は、その主観性の強調という点で、それまでのあらゆる時空論と一線を画すものであった。非常に簡単に言うならカントにおける空間とは、感性の形式として、我々の主観の側に内在する「純粋直観」である。カントはこうした空間を認識からの経験的要素の捨象、という手法で導出する。

「そのうちに感覚に属するものがいささかも見出されない全ての表象を、私は（超越論の意味において）純粋と呼ぶ、それゆえ、感性的直観一般の純粋形式は心性のうちにアприオリに見出されるのであり、しかも感性的直観の純粋形式のうちで全ての多様がある種の関係において直観されるのである。感性のこの純粋形式はそれ自身純粋直観と呼ばれる。したがって、ある物体の表象から、悟性がそれについて思惟するもの、実体、力、分割性等々、同様にそのうちで感覚に属するもの、つまり、不加入性、堅さ、色彩などといったものを取り除いても、この経験的直観のうちからまだ何ものか、つまり延長と形態が私には残留する。これらは純粋直観に属する。つまり、この純粋直観はアприオリに、諸感官のもしくは感覚の現実的対象なしにも、感性の単なる形式として心性のうちで生ずるのである。」³⁰⁾

つまり我々の経験的認識において、外部からの刺激によって生じた経験内容を順次に捨象していても、そうした経験内容自体を可能にする経験の形式が最後に残り、しかもそれはあらゆる経験に先行して既に我々の内部に存在していなければならない、とカントは主張したのである。そしてその形式はあらゆる経験を可能にする形式であるがゆえにそれ自体いかなる経験も含まない、という意味で純粋な形式である。

（ワインを満たしたグラスからワインを除けばそこに空のワイングラスが残るように。そしてグラス内部にあるときのワインの形状を決定するのはグラスの形状である。）このような形式は対象の認識が存在するときには漏れなくその根

底に必然的に存在するという意味では実在的である（「経験的実在性」を持つ）。またこの形式は、対象の認識を可能にするためのアприオリな形式として認識する対象に（時間的に、ではなく論理的に）先行するが、対象認識という本来の目的を離れ、それ自身実在的に空間自体として存在すると主張するならそれは「無」である。（「超越論性観念性」を持つ）。空間（と時間）はあくまで「経験の可能性の制約」に過ぎない。これがカントの「超越論的時空論」である。

このような時空論を採用すれば、我々の認識するところの「世界」は単なる「現象」にすぎない。それは我々の感官というものに不可避に依存した、単なるものの現れであって、我々は知覚する対象それ自体をありのままの姿で知覚することは決してできない。知覚はどこまでも知覚者の認識性状に相対的であり、異なる認識性状を持つ者の目には当然異なる世界が映じることになる。これを乱暴な言い方だが「主観的時空論」と呼ぶことにする。とはいえそれは人によってそれぞれ違う空間が存在し、人の数だけ空間が存在するのであって、相互に共通する空間が存在しない、などという観念論的な主張では全くない。「経験の可能性の制約」としての空間という着想は、「私」の場所を中心としつつも、公共的で唯一の空間、というものを可能にするものである。

そもそも空間的認識を持つ、とはどこであれ、「どこか」にもものを認識することを意味する。そしてこの「どこか」とは「ここ」という場所との関係を抜きにしては有意味なものとはならない。ものの認識とはある感覚が「私の外の何ものか」³¹⁾と関係付けられていることに他ならないのである。そしてものの認識は前後左右いずれの場所にせよ、「私と並列的なもの」として、「互いが互いの外にあるもの」としての関係を持たざるを得ない。それはつまり、共通の「場」において並べられねばならない、ということである。そしてこの「場」こそが空間であり、「たとえいかなる対象も空間のうちに見出されないということはたぶん考えられうるとしても、いかなる空間も存在しないと考えることは決してできない」³²⁾のである。そして「私」になんら

かの「もの」、対象が与えられる限り、その「もの」がどれほど遠くに与えられようと、そこには唯一の空間が設定されねばならない。ひとたび「もの」が与えられれば、「私」と「もの」と間に唯一の空間が生じる。「もの」が与えられる限り空間はどこまでも延長する。ゆえに空間は「与えられた無限量」³³⁾である。そしてそのような唯一の空間が設定される限り、「私」は「もの」に可能的にはいつでもアクセス可能でなければならない。試みに「到達不可能な二つの独立した空間」というものを考えてみよう。つまりそれは我々の占める空間とは別に、我々がアクセス不可能な別の閉じた空間を想定することである。「全く独立した二つの空間」。これが如何に矛盾したものであるかは容易に理解できる。二つの空間が「全く独立した」ものである、と言えるためには二つの空間が互いに外的に並立していることを意味する。そして並立している以上はそこには並立を可能にするなんらかの「場」が存在しなければならないだろう。そしてそのような「場」が存在する限り、我々はその「もう一つの空間」にアクセス可能であるのでなければならない。ではその二つの空間を並列せしめている「場」とは何なのか？それは唯一の空間以外の何であるというのか。このようにカントにおいて、「唯一の空間」というものは、我々がそもそも何かを語る際に前提としなければならない可能的経験一般の必然的条件であり、経験の有意味性の限界なのである。

4. カントの空間論Ⅱ—「私」の空間—

さて、このようなカントの空間論にもう一点、重要な要素を付言したい。上記の『純粹理性批判』においては顕在化してはいないが、カントの空間論の主観的性格を決定付けた著作として『空間における方位の区別の第一根拠について』（以下『方位論文』）がある。この著作において、カントはそれまで賛同していたライプニッツ的な空間論からニュートンの絶対空間の説へと大きく近づいている。つまり空間がものの単なる関係秩序に過ぎず、ものに相対的であるとする説から、空間内部のものとは無関係に、

それ自身で存在する均質な場として空間をとらえる説に限りなく接近している。しかしカントは「位置」と「方位」の区別という彼独自の考察を行っているという点においてニュートンの絶対空間から一線を画していると言える。

「…空間の様々な部分が相互に関係しあうその位置というものは、あらかじめ方位を前提とする…。すなわち、その方位に基づいてそれぞれの位置がそのような関係に秩序付けられるのであり、そして最も抽象的な意味においては、方位は空間におけるある物が他の物に対して持つ関係—これが位置という概念の本来の意味であるが—のうちにはなく、方位はむしろ、こうした諸々の位置の体系が絶対的な宇宙の空間に対して持つ関係のうち存するのである。」³⁴⁾

つまり空間における物体の「位置」は、絶対的な全体空間との関係において規定された「方位」に基づいて秩序付けられるのである。だがしかし、この「方位」は単に絶対空間だけによって規定されるわけではない。

「物体のかかわる空間においては、その三つの次元ゆえに三つの平面を考えることが可能であり、それらはどれも互いに直行している。およそ我々の外部に存在しているものについては、それらが我々自身に対する関係を持つ限りにおいてのみ、我々は感覚器官を通じてそれらを知る。だから我々はまず、これらの〔三次元の〕互いに交差する切断面が我々の身体に対して持つ関係から、空間における方位という概念を生み出す最初の根拠を手に入れるとしても、別に不思議ではない。我々自身の身体の縦の長さがその上に垂直に立つ平面は我々自身との関係において、水平と呼ばれる。そしてこの水平の平面がもとになり、上及び下という語で呼ばれる方位が区別されるようになる。」³⁵⁾

ここからさらにカントは身体において直交する軸から左右、続いて前後の概念を得る操作を行っているのだが、この箇所から空間の三次元

性の理解の根本に、カントが自分自身の「身体」を置いていることは明らかである。「私の右に石がある」と言うとき、石そのものに「右」という性質は属していない。あくまでそれは私の身体との関係で「右」という性質を付与されるのである。一見客観的な東西南北という方位についても結局は観察者の視点に相対的な性格を免れない。このような空間をカントは「絶対的な空間」と呼ぶが、実はこれはニュートンの絶対空間とは異なるものを想定してしまっていると言わざるを得ない。ニュートンの絶対空間にこのような身体との対応関係は全く混入する余地は無いのである。いずれカントがニュートンの空間論さえ離れ、「現象の形式」としての超越論的時空論へと移行するのは必然的なことだったのである。

以上のように『方位論文』時点でのカントの空間論においては空間性の規定に自らの占める場所、自らの肉体が座標軸の役割を果たしている。彼にとって空間とは「私の身体」をその根底においた、どこまでも肉感的な空間なのである³⁶。このような空間の肉感的な性格は批判期においては直接顕在化しないが、それは彼の思想が変化したからではなく、「直観形式としての空間」という思想にその肉体性が取り込まれてしまったからに過ぎない。空間が直観形式であり、我々の感性の形式である限り、それは不可避に「ここ」＝「私の場所」を中心とした空間であり、当然私の「身体」を中心とした空間でもある。「世界」とは、「私」の可能的経験の現象する「舞台」であり、「私」を中心に無限の広がりを持つ。そこでは常に、「私」がどこまでもアクセス可能な対象が、「私」自身と一定の（空間）関係を持って存在するのである。「我々が全ての経験を得ることになる舞台」である地理学的「世界」全体の把握においてもこのような「私」という中心が存在し、それは一定の視野の範囲内に経験を限定すると同時に、どこまでも拡張可能な全体を成り立たしめる基礎として「世界」の根底に存し続けるのである。

5. 統制原理としての「全体」

ここまでの議論を見ると、空間についてのカントの一見対立する二つの説を見出すことができる。すなわち、『自然地理学』において個別的知识に建築術的に先行する「全体」は、地理学的空間を限界づけることを意味し、その限りで有限な空間を提示することになる。これは第一批判における可能的経験の領野としての無限空間という考えと対立する、かに見える。しかしカントは空間を有限とする考えと無限とする考えの対立を第一批判の「純粹理性のアンチノミー」において「みかけの問題」(Scheinproblem) だとして退ける。すなわちこれらの対立は現象と物自体の区別を見損なって互いの領域を越境することによって生じた対立であるとするのである。つまり、経験の対象を可能にする空間は、それが現象の形式である限りではどこまでも「与えられた無限量」として確保されている。ところが我々の有限な理性がそこに空間知識の体系的統一を見出すためには、そうした無限空間をひとときに見渡す視点を持つか、その都度有限な全体をそこに設定して建築術的統一をもたらさねばならない。そして前者の視点を持つことが神ならぬ有限な人間には不可能である限り、我々に可能なのは後者の選択肢のみである。このように空間が有限であり、かつ無限であるというカントの言説は相互に対立するものではなく、空間に対する、「構え」「関心」「かかわり方」においていわばその次元を異にする二つの態度の結果生じるものであり、それは「相違」であって「対立」ではない。そして我々はこうした二つの態度を両方持つことなしに秩序だった空間的知識を持つことは不可能なのである。

地理学的「全体」についてさらに言えば、それは実在の対象が与えられるために使用されてはならない、とカントは言う。つまり世界の「全体」が、直接対象を与える「構成的原理」(konstitutives Prinzip) に従って実在的に明示されることはあってはならないのである。ゆえに経験世界においては世界の「全体」も「限界」も存在しない。そして地理学的「全体」は

統制的原理（regulatives Prinzip）としてはた
らき、あくまで体系の統一のための問題設定の
「場」として定立されるべきものなのである。
しかしその「場」において実際の経験的知識の
獲得・構成は、あくまで現実の経験において生
じなければならない。このように経験的知識の
獲得とその体系的統一は同じ対象を扱いながら
全く異なった原理に則っている。そうでなければ
可能性があれば即その現実化が起こることにな
り、勝手気ままな空想と現実的知識の境界が
なくなってしまうであろう。そして純粋理性の
アンチノミーとはまさにそうしたことが原因で
生じる対立であり、確実な知識の存立を危うく
する人間理性の危機的状況を回避するためにも、
世界に対するこのような「かかわり方」を
区別することは不可欠なのである。

したがって「純粋理性のアンチノミー」にお
いて空間の有限性と無限性が両立可能であるよ
うに、可能的経験の領野としての無限空間と理
性の統制的使用としての地理学的全体（有限）
空間は、我々有限な人間にとって両立可能であ
るばかりでなく、それら両者がそろってこそ空
間についての我々の体系的知識、すなわち地理
学が可能なのである。

ここでもう一つ確認しておかねばならないの
は、カントにとって「世界市民」という概念も
また統制的原理である、ということである。彼
は『世界市民的見地における普遍史の理念』に
おいて人間本性の自然な素質として非社会的社
交性を挙げている。彼によれば人間は、一方で
社会へ出て人と交わろうとする傾向を持つ反面、
一人でいたい、すべてを自分の思い通りに
したい、という非社会的傾向性をも併せ持つ。
こうした傾向性が「確かに一緒にいるのはいや
だがしかし放っておくこともできない仲間のも
とで、功名心や支配欲や所有欲に駆り立てられ
一つの地位を獲得するまで人間を差し向ける」³⁷⁾
ことになる。この非社会的性質はそれ自体は災
難をもたらすものだが、同時に人間に自己訓練
を強いて、社会的秩序を構築する原因となるも
のである。その意味では、人間の自然状態での
非社会的社交性こそが「粗野な状態から抜け出
て、人間の社会的価値を本質とする文化的状態
への第一歩が生じ、またことのと看、あらゆる

才能が少しずつ伸ばされ、趣味が形成され、ま
た絶えざる啓蒙によって思惟様式の構築が始ま
る」ための必要条件であるとカントは考える。
また彼は『人間学』においても、あらゆる時代
のあらゆる国民に見られる人類の性格として
「互いに平穩無事に共存しないわけにはいか
ず、しかもなお絶えず互いに争いあうことを避
けることもできない」³⁸⁾という性格を挙げている。
そしてここでも個人個人や国家同士が互い
を法律で牽制しつつ、最終的には人類を総体と
して統合する「世界市民的な社会」³⁹⁾へと到達
することが自然本性として定められていると述
べている。そしてこの「世界市民的な社会」と
は「それ自体は到達不可能な理念」である、と
もカントは言う。それは常に目指されるべき理
念として人類を統制し、不断の進歩を指導しつ
づけるはたらきを行うのである。二つの経験科
学のうち一方の外官の対象を扱う地理学が体系
的統一のために、空間的对象を統一する世界「全
体」という統制的理念を必要とするのとそのま
まパラレルに、経験科学のうち内官の対象を扱
う人間学もまた、人類全体を統一する「世界市
民」という統制的理念を必要とする。カントに
おいて啓蒙の為には一経験的知識の啓蒙にも、
経験的徳の啓蒙にも一それぞれの対象の「全
体」を統一する統制的理念が不可欠なのである。

6. カントの眼差し

以上で論じられた空間論はカントの体系にお
いて客観的で普遍的な数学・自然科学を可能に
し、それをもとに経験的な科学としての地理
学・人間学が可能となる。現象の形式としての
空間は無限であり、閉じた体系を成すことは無
いが、学問的知識の体系の構築の為の建築術的
な理念という観点から、そこに統制的「全体」
が設定され、さまざまな自然地理学的認識がそ
れぞれ固有の位置を「全体」の中に占めるこ
となるのである。自然地理学における多様な知
識の獲得も、その秩序付けも、彼の空間論を根
底においてはじめて可能となっている。空間の
有限性と無限性という対立は、『純粋理性批判』
のアンチノミー論において両立可能なものとな

り、ここで見事に昇華していると言える。

「私の身体」を中心とした無限の空間においては、どこまでもアクセス可能な経験の領野が開けており、その限りで世界は我々にとってどこまでも到達可能である。それは「私の世界」である、といてよいであろう。そこでは自らの意思さえあれば限界無く移動して目的地まで到達することができる。また、一步も動かさずして、自らの世界に伝聞や記述によって得た知識を嵌め込むことも可能である。そこに広がる空間は可能的経験の領野であり、つまり可能的「啓蒙」の領野である。そこに自ら主体的に建築術的理念をもって知識の体系化、吟味を行うとき、我々はまぎれもなくそこで「啓蒙」を行うのである。「啓蒙」とはカントによれば「自ら招いた未成年状態から抜け出すこと」であり、「自分自身の悟性を用いる勇氣を持つこと」⁴⁰⁾である。たとえ実際にその地に旅行しても、人に連れて行かれたり、その地方の地理的位置関係、自然科学的知識などをもっていなければ、それは不確実な知識となるし、「実際に行った」ということがあらゆる批判を受け付けなくしてしまって却って妄執の源泉になることさえある。自らの前に広がる空間に対して自ら考え、自ら全体を構想し、自らそこを旅し、そして自ら世界知の体系を構築すること—カントの自然地理学はまぎれもなく理性が「敢えて賢くあれ！」⁴¹⁾と「世界」へと旅だつことを可能にする啓蒙精神の体現なのである。

このような思想の特徴に、私はカントの生涯過ごしたケーニヒスベルクという町の国際的辺境都市としての性格を重ね合わせてしまう。ベルリンとリガに代表される東西文化の中継地として栄え、さまざまな文化が出会い、ロシアからの占領も経験し、さらにロシア占領下になってかえって発展したこの町で、カントは様々な文化の出会いと衝突とを見つめ、何を思ったのか。そこは、「辺境」都市であって、ヨーロッパ文化の限界点であり、つまりヨーロッパ的なものと非ヨーロッパ的なものの出会いの場であった。非ヨーロッパ的なものとの出会いがあってはじめて、ヨーロッパ的なものがアイデンティファイされる。そこは自らの形式の非絶対性、主観性が自覚される場であり、自己の形式の有

限性を自覚する場である。同時にそこは、「啓蒙」都市であって自らの理性によって蒙り領域が自らの形式によって理解可能な(アクセス可能な)領域として拡大していく中心地であり、最前線である。有限性の理解のもとで、有限な自己の領域である「世界」を、理念としての「全体」を目指して不断に拡大していく最前線なのである。目の前で繰り広げられる異質な文化、異質な人間の異質な営み、それが全て同じ天上の星座のもとで繰り広げられていることへの感嘆。また、自然状態では不可避に衝突する人間同士の間で生ずる問題を解決するための唯一の手段である普遍的道德法則と、それが漸近的に到達すべき理念としての世界市民による完全な市民連合。これこそがカントがこの「辺境」の「啓蒙」都市で見つめつづけていたものであり、彼の「眼差し」には、この18世紀のケーニヒスベルクという町の特殊な状況が大きな影響を与えたと思われる。

現代の我々を顧みれば、既に我々の前には数時間で遠い国へと到達可能な交通機関もあり、クリック一つで世界と繋がるツールも存在している。いわゆる「国際化」は機能的には既にほぼ完成し、到達可能な領野は極限まで到達している。しかし反面では世界中を一つに繋げるツールを利用して文明間の絶望的な断絶がより一層明確になってしまっている。アメリカは衛星中継で非アメリカ的な文明を「悪の枢軸」と呼び、イスラム世界の過激派がインターネットで「聖戦」を世界中に呼びかける光景。そして世界中で繰り広げられる暴力と報復の死の連鎖。このような絶望的な断絶を見せられるのを我々は日常としている。これは異常な事態ではないのだろうか？インターネットや衛星中継で世界が繋がっても世界の人々は全く繋がらないどころか、そうしたツールを利用してさらに一層その溝を広げ、多元主義から独断主義へと加速度的に突き進んでいるのである。

カントにおいて「啓蒙」の推進は、あらゆる(宗教的・自然科学的)偏見、不寛容からの脱却であり、「自ら考える」自由な態度の産物であった。この自由は理性を「公的に使用する自由」⁴²⁾を意味している。ここでいう「公的」とは通常我々の理解する「それぞれ職務上の」と

というような意味ではなくむしろその反対である。警察官や市役所員はその職務上は、「警察官」や「市役所員」というその本人が属する、いわば「私的な」義務に従わねばならない。よって非合理的な職務であっても適法である限りこれに則って職務を遂行しなければならない。しかし、公的な、つまり法的枠組み、もっと言えば国家的枠組みさえ離れた一人の「世界市民」としてこの法律の妥当性を学者として議論し「公衆に伝える」⁴³⁾ ことは大いになされてよいし、むしろこのような理性の公的使用の自由は常に確保されなければならないとカントは言うのである（つまり我々が「私的」といえば思い出すような、例えば警察官の横領や教師の猥褻行為などは、カントにとってははなから論外なのである）。ここで学者というのは職業的な大学教授ということをももちろん意味しない。誰でも学者の立場でそれぞれの意見を述べるのが可能である。むしろそのような態度がなく、教員という私的な職務の範囲内でしか発言しないならそれは「世界市民」とは呼べないのである。つまり啓蒙する「世界市民」の概念は、私的空間の制約を越え、公共的言論空間への参入の可能性を常に既に確保している政治的、倫理的空間概念を根底に置くものであると言えよう。これはひとえにカントの「世界」概念の多重性、包括性に由来するものなのである。

この思想を現在の我々の様々な異文化間の対立においても、有効な指標となり得るように私には思われる。我々個人の、「日本人」であるとか「キリスト教徒」であるとか、「資本主義」であるなどの「私的」な属性を離れ、一つの世界に統一された世界市民として自律的に思考し他人の立場になって発言することで、絶望的な対立に架橋する可能性が生まれるのではないだろうか。事実カントは世界市民主義を「自分を単なる一世界市民と見なし、そのように行為する考え方」であり、「全世界を自己の中に包み持っているものとして自分をみなしたり、振舞ったりする」「エゴイズム」⁴⁴⁾ に対立するものとして位置づけている。これは一元的に自らの基準を「グローバル」と称して一方的に強制するものではなく、むしろその対極に位置するものであろう。このカントの「世界市民的社會」

という構想は一見あまりに理想主義的なものであるように思われるかもしれない。しかし注目すべきことは、カントはこの「世界市民的社會」という理念を「非社会的社交」「互いに平穩無事に共存しないわけにはいかず、しかもなお絶えず互いに争いあうことを避けることもできない」などといった人間性への冷静な分析から導き出しているということである。「人類の意志は善であるが、しかしそれを貫き通すのが難しい」⁴⁵⁾ という分析は甘い理想主義からはるかに遠いものであろう。彼の「世界市民的社會」という構想は、人間の弱さを自覚した上でそれを克服する為に理性が選択するロングスパンの戦略とでも言うべき性格をそなえているのではないだろうか。そして国家間の争いとその影響を見るという点において、他国によって占領されたにもかかわらずロシアの寛容政策によってかえって繁栄したというケーニヒスベルクの特殊な状況はその幸運な一例であった、とだけはいうことができよう。

既に述べたように現代において機能としての、ツールとしての国際化は既に完成しつつある。しかしそこに自ら考え、自ら判断する理性は、「全体」を構想する理性は、存在しているだろうか。垂れ流される情報の渦に対して自ら思考する態度をもっているであろうか。そうしてそこで起こる問題を自分の、人類全体の問題として解決していこうという長期的戦略をそなえた眼差しをもっているであろうか。ケーニヒスベルクから一歩も出ずに、カントはアフリカのホッテントット人がライオンやヒョウを食べる姿を描き、ブラジルのハチドリの子について語り、ラップランドの巨人についてまことしやかに語る。それらは今読めば不正確で、偏見の多分に混じった雑多な知識の集積だが、カントは少なくとも自ら考え、「全体」を構想し、敢えて賢くあろうと情熱的にこれらの知識を語った。事実、彼の講義はあらゆる身分の聴講者が押し寄せ、大変評判がよかったという。情報の洪水のなかにありながらそこに自らアクセスせず、ただその情報を受け取るだけならば、目の当たりにする戦火とその報復、そのあとに残る累々たる屍と遺族の慟哭を見て、テレビを切っ

済ませてしまうなら、我々は陸の孤島ケーニヒスベルクよりずっと辺鄙な、「文明化した世界の最果て」に籠もっているのではないだろうか。

注

1. 「光のあたっている地域のすぐ近くでも別の地域は暗闇に閉ざされたままとなる」クリスチャンガルヴェ・ガルヴェ「小都市の衰亡に関する研究断片」1796.
2. Otto van Baren : Der Zorn Friedrich des Großen über Ostpreußen. In : Altepreußische Monatsschrift (Königsberg) 22. 1885. S.188.
3. Kant : Anthropologie in pragmatischer Hinsicht.1798. S120f.-121f. (以下カントの著作のページは全てアカデミー版に対応)
4. L.v.Baczko : Geschichte und Beschreibung der Stadt Königsberg. 1787. S.592.
5. Aus dem Briefwechsel Voltaire-Friedrich der Große. Hrsg. von. H. Pleschinski. Zürich 1992. S139. Friedrich an Votaire. 27.Juli 1739.
6. Otto van Baren : Der Zorn Friedrich des Großen über Ostpreußen. S.188.
7. Reinhard Wittmann : Der deutsche Buchmarkt in Osteuropa im 18. Jahrhundert. In : Ders. Buchmarkt und Lektüre im 18. und 19. Jahrhundert. Beiträge zum literarischen Leben. Tübingen 1982. S.94.
8. 『啓蒙の都市周遊』エンゲルハルト・ヴァイグル 三島憲一・宮田敦子訳1997. p.18.
9. L.v.Baczko : Versuch einer Geschichte und Beschreibung der Königsberg.1804. S.381f.
10. Erinnerungen aus dem Leben J. G. v. Herder, gesammelte und beschrieben von Maria Caroline Herder. Hrsg. v. J. Georg Müller. Tübingen 1820. Bd.1. S44.
11. Cassirer : Kant's Leben und Lehre. S.12.
12. Immanuel Kant Sein Leben in Darstellungen von Zeitgenossen – Die Biographien von L.E. Broski, R.B. Jachmann und A.Ch.Wasianski. 1912. S.153.
13. 「カントはグリーンを、多くの知識と深い理解をそなえた人物と見ていましたので、その『純粋理性批判』には、あらかじめグリー-

ンに示して、その公平で、いかなる体系にもとらわれない理解力による、批評を受けないで書いた文章というものはない、と明言していたほどです。」 ibid. S.154.

14. 『啓蒙の都市周遊』 p.222.
15. 浜田義文『若きカントの思想形成』の主に p.376.~377.
16. また浜田は、ルソーという強烈な個性を理解するうえでカントとルソーとの「地理上の適当な距離」が幸いしたとも論じている。「ルソーからの影響を受けぬほどの遠さでなかったと同時に、それを冷静に受け止めぬほどの近さでもなかった」ケーニヒスベルクだからこそ、ルソー本人の破天荒な行動や世評に影響されずにルソー思想そのものとの対話が可能になった、という見方も、ルソーがディドロ・ダランベール・ヒュームなどの同時代人との関係をことごとく破綻させたことを考えればそれなりの説得力を有していると言えるだろう。
同上 p.355.
17. Kant : Prolegomena zu eienr jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können. 1783. S.260.
18. Kant : Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen. 1764. S.44.
19. 「地理学辞典」日本地誌研究所
20. Kant : Physische Geographie. 1802. S.158.
21. ibid. S.158.
22. ibid. S.159.-160.
23. ibid. S.161.
24. ibid. S.161.
25. ibid. S.158.
26. ibid. S.159.
27. Kant : Anthropologie. S.120.
28. ibid. S.120.
29. Kant : Entwurf und Ankündigung eines Collegii der physischen Geographie. 1757. S.3.
30. Kant : Kritik der reinen Vernunft. 1787 A21-22,B34-35
31. ibid. A23,B38
32. ibid. A24,B39
33. ibid. A25,B39
34. Kant : Von dem ersten Grunde des Unterschiedes der Gegenden im Raume. 1768. S.377.-378.

35. *ibid.* S.378.-379.
36. 以下のような表現にそれは特徴的である。
「方位の判断に置いては右側と左側が違った感じを持つことが必要なのである。」 *ibid.* S.380.
「この世に最初に創造されたものが人間の手であると想定すれば、その手は右手か左手のどちらかであろう。」 *ibid.* S.383.
37. Kant : *Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürglicher Absicht.* 1784. S21.
38. Kant : *Anthropologie.* S.331.
39. *ibid.* S331.
40. Kant : *Beantwortung der Frage:Was ist Aufklärung?* 1784. S.35.
41. *ibid.* S.35.
42. *ibid.* S.36.
43. *ibid.* S.38.
44. Kant : *Anthropologie*,S.130.
45. *ibid.* S. 333.

Kant's Eyes at the Frontier Enlightenment City, Königsberug : Reconsideration of Kant's *Physical Geography*

Jio HOJO

This paper attempts to reconsider Kant's *Physical Geography* (1802). In short, my aim is to find the correlation between Kant's space theory and his geographic theory, that is not regarded as important by both philosophers and geographers, and then, to revive Kant's eyes at the frontier city, Königsberg. "Kant's Eyes" are namely the enlightening Cosmopolitan's eyes. I believe that his eyes are applicable to even the problems of the present day.

After the introduction, in part one I observe the situation of Königsberg, where Kant lived over all his life, and then, revive it as the background of his thought. In part two, I analyze Kant's *Physical Geography* by observing the keyword "Enlightenment". It will make clear that Kant's geography has sought the movement for enlightenment. Kant constructed a systematic knowledge architecturally and by this task he could regard the world as a "whole". In parts three and four, I observe Kant's space theory which makes experience in general possible. It will throw light on the infinity and transcendental subjectivity of space. In part five, I analyze the relation between the architectural concept "whole of space" in part two and space theory in parts three and four, and it will become clear that Kant's space theory and his geography are correlated with each other organically. At last, in part six, I revive Kant's eyes, and observe what validity it has for the problems of the present day.

Keywords : Immanuel Kant, Königsberg, geography, enlightenment, world